

新米しんまいや夜よるは昔むかしの話はなしして

山田真砂年やまだ まさとし

今年収穫された新米を炊きあげる。日本の主食は多様化されたとはいえ、米への愛着がやむことはない。米のひと粒ひと粒のつややかな輝きと甘い香りに包まれ、今年の無事を確かめる。新米が並んだ夕食、あるいはその後の団欒（だんらん）。過ぎし日の思い出はセピア色に褪（あ）せてはいるが、言葉にすればたちまち確かな記憶となつてよみがえる。満ち足りた秋の夜が招き寄せる幸せな時間が行き渡る。「稲（いね）」主宰。